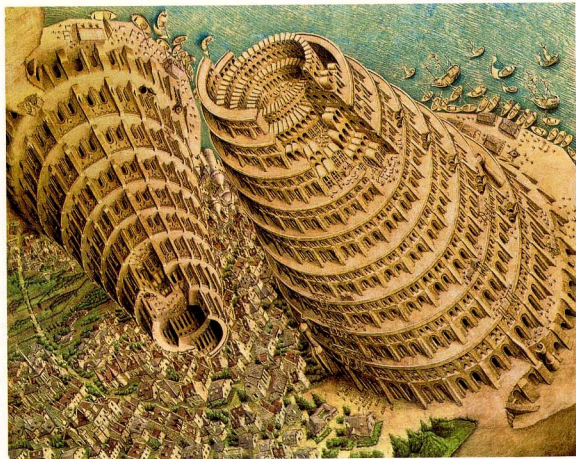


バベルの塔
1985



バベルの塔 1986.11

上村次敏君の作品 河北倫明

旧知の上村次敏君が一昨年イタリア旅行で取材した近作による個展をひらくという。私は同君の学生時代からそのユニークな資質に注目していたが、若くして頭角を現した後、しばらくは実務についていた。しかし、これがかえって同君の才能を強靱にし、新鮮なバネと營養をあたえたものようである。前景と背面、右と左の両側からするどく古建築の美をとらえ、意表をつく構成を具現する行き方は、ただ幾何学的な遊びといったものではない。そこには形と色のころよリズムがあり、微妙な変化をひそめ、さらに群集や船や旗などの生活的風趣が好ましい生彩を生んでいる。新古の時間と空間にわたる大らかに精妙な画世界である。クレモナや、ピサや、シエナの大聖堂も、サン・マルコの広場も、こんな視角で眺められることは、何ともいえず愉快だ。同君は早くからバベルの塔を描きたいとの意欲を燃していたが、その気持もよくわかるであろう。（『上村次敏展《交錯する視角・二つの視点》』1986年9月16日(火)～27日(土) 青木画廊）